

口腔衛生への気づきに何が影響を及ぼすか

— 歯学部国際歯学コース学生との交流プログラムからの検討 —

後藤美由紀 岡 広子 天野 紳一
Phuong Thao T Nguyen 加藤 功一

1. はじめに

わが国の20歳未満で未処置のう歯を持つ割合は、年々減少傾向を続けている。その一方で、6年に1回実施される歯科疾患実態調査の結果では、小学生（5歳以上9歳未満の年齢階級：平成11年度24.3%，平成17年度14.6%）から中学生（9歳以上14歳未満の年齢階級：平成17年度57.7%，平成23年度34.7%）の年齢階級の間で、未処置のう歯の割合が倍増する傾向は変わらない。口腔保健に対して保護者の介入が大きな影響を与える学童期から、児童自身の口腔保健に対する関心・意識を高め、思春期の自立した口腔保健管理への導入を図ることは今日においても非常に重要な課題である。

東雲小学校では、年に2回行う生活リズムに関する実態調査の中で歯みがきについての調査・事前事後指導を行っていることもあり、処置歯を含むう歯所有率は全校で42.4%（平成25年度全国54.1%）と全国に比べ低い。しかし、調査について児童自身のみで回答するだけでなく保護者にコメントをもらったり保護者とともに記入したりすることもあり、保護者が歯みがきの必要性を感じるとともに家庭での指導についても意識しているとも考えられる。また、調査の期間（1週間）のみの実態であるため、児童自身の口腔保健に対する関心・意識が高いとは言いきれない。

担任や養護教諭による保健指導の機会も多くはないため、児童の口腔保健に関する意識を高めるために、平成24年度より延べ6回にわたり、児童と国際歯学コース学生を主体とする歯学部学生の国際交流に口腔保健と食を織り交ぜた「国際交流と連携した口腔衛生への気づきを生むプログラム」を実施している。交流会の活動内容は、(1)外国語活動に関連して児童の「伝えたい」というモチベーションを向上させること、(2)異なる文化を理解するきっかけを与えること、(3)

自己理解を深めることを、(4)保健活動に関連して口腔衛生への気づきを生むこと、を目的として検討を重ねてきた。歯学部では、平成23年度よりインドネシア、ベトナム、カンボジアからの留学生が所属する国際歯学コースを開始し、病院実習前の歯学専門科目は正規生（主に日本人）と外国人留学生が同じクラスの中で英語を用いて学ぶ教育体制となっており、児童との交流会も主に平易な英語を用いてこれらの学生が参加している。今年度は、過去2年の国際交流プログラムの成果を元に交流内容を改変し、事前の動画鑑賞による準備1回と実際の交流会2回からなるプログラムを計画した。9月に5,6年生単式学級計4クラスで交流会を実施し、歯学部側からは国際歯学コースをはじめとする外国人学部学生2名および歯学部正規生3名、国際歯学コース学生の母校出身の外国人大学院生および外国人教員3名が参加した。交流会の内容を表1に示す。この交流会の結果を踏まえ、平成27年2月に5年生単式クラスを対象とした第2回の交流会を予定している。

2. 研究の目的・方法

本研究の目的は、(1)国際理解に対する児童の意識に交流プログラムがどのように影響を及ぼしているのかを明らかにすること、(2)交流の対象である歯学部学生の背景と連動する口腔保健に対する児童の意識に交流プログラムがどのように影響を及ぼしているのかを明らかにすること、を目的とした。児童の変化を評価するために、国際理解測定尺度を改変した林原らの項目（2010）を参考に、口腔保健に関する項目を加えた質問紙を作成した。同時に、当日の交流会に関して「楽しかった内容」、「新たな発見があった内容」、「自分が頑張ったと思う内容」を調査し、交流会の内容との関連性を検討した。「楽しかった内容」、「新た

Miyuki Goto*, Hiroko Oka*, Shinichi Amano, Phuong Thao T Nguyen, and Koichi Kato: Impact of Oral Health Awareness — A Pilot Study of an Exchange Program between International Dental Course Students and Elementary School Students — *These authors contributed equally to this work.

な発見があった内容」, 「自分が頑張ったと思う内容」については, 記述回答を内容ごとに「コミュニケーション (言語)」, 「コミュニケーション (交流自体)」, 「コミュニケーション (積極的な姿勢)」, 「食文化」, 「食事以外の文化・言語, 学校生活 (給食)」, その他に分類した。

対象は, 第1回交流会に参加した4クラスのうち6年生単式学級1クラス38名の児童とした。質問紙調査は, 動画鑑賞前 (口腔保健に関する項目無の質問紙), 動画鑑賞後 (口腔保健に関する項目無の質問紙), 第1回交流会後 (口腔保健に関する項目有の質問紙) に実施した。変化の検証の際には事前の動画鑑賞日に欠席した1名の回答を除いた37名分の回答を用いた。他3クラスにも第1回交流会後に口腔保健に関する項目有の質問紙調査を実施した。



図1 動画の一部

歯と歯ブラシのイラストを加えて, 児童の関心を引き起こすように工夫した

表1 第1回交流会

月日	平成26年 9月24日 (水)
学年	第5学年1組 (第2校時), 2組 (第1校時) 第6学年1組 (第3校時), 2組 (第4校時)
場所	図工室
学習活動 と 内容	1. VTRによる自己紹介と母国&好きな食べ物紹介 (6-1のみ交流会前に視聴)
	2. 歯学部学生登場, 本時の説明
	3. 自己紹介ゲーム
	4. グループに分かれて, 各国の地理と食事に関する紹介と質疑応答
	5. まとめ
	給食 インドネシア人学生2名, ベトナム人学生1名, カンボジア人学生1名, ブラジル人学生1名, 日本人学生3名, ベトナム人教員1名
	昼休み ・音楽室等で各自交流



b. 自己紹介

交流会参加者各自の自己紹介内にも歯科にかかわるイラストを挿入した

表2 第2回交流会 (予定)

月日	平成27年 2月25日 (水)
学年	第5学年1組, 2組
場所	図工室
学習活動 と 内容	1. グループに分かれて, 歯学部学生による口腔衛生に関する各国の状況の紹介
	2. 質疑
	3. まとめ
	給食
	昼休み ・音楽室等で各自交流

3. 成果と課題

第1回交流会の主目的は食に関する話題を介した国際理解であった。実際の交流会後には「色々な国の人たちと知り合いになりたい」、「多くの外国人と友達になりたい」、「自分のいいたいことを英語で表現したい」といった質問紙の項目に対して「はい（当てはまる・

よく当てはまる）」との回答が増加していた（表3）。

記述回答にも、コミュニケーションを取り上げたものが多く認められた（表4 a, b, c）。また、表4に見られるように、「新しく発見したこと」として、「食文化」に関するキーワードも散見されたことから、交流会当日の内容に沿った結果と考えられた。

表3 交流会前（ビデオ鑑賞前）と第1回交流会後の児童の意識変化

		いいえ	はい
1.	さまざまな国の伝統料理を食べてみたい	ビデオ鑑賞前	33
		ビデオ鑑賞後	32
		第1回交流会後	31
2.	和食のことをもっと学びたい	ビデオ鑑賞前	28
		ビデオ鑑賞後	28
		第1回交流会後	25
3.	外国でその国の人たちと同じように生活してみたい	ビデオ鑑賞前	21
		ビデオ鑑賞後	25
		第1回交流会後	23
4.	色々な国の人たちと知り合いになりたい	ビデオ鑑賞前	28
		ビデオ鑑賞後	32
		第1回交流会後	34
5.	ほかの国の習慣を知りたい	ビデオ鑑賞前	23
		ビデオ鑑賞後	24
		第1回交流会後	30
6.	ほかの国の人と一緒に遊んでみたい	ビデオ鑑賞前	29
		ビデオ鑑賞後	31
		第1回交流会後	33
7.	外国の人に対して親切にしたい	ビデオ鑑賞前	33
		ビデオ鑑賞後	32
		第1回交流会後	35
8.	多くの外国人と友達になりたい	ビデオ鑑賞前	27
		ビデオ鑑賞後	29
		第1回交流会後	34
9.	日本の伝統文化をもっと学びたい	ビデオ鑑賞前	22
		ビデオ鑑賞後	26
		第1回交流会後	25
10.	いろいろな国に行ってみたい	ビデオ鑑賞前	32
		ビデオ鑑賞後	34
		第1回交流会後	33
11.	もっと英語を学びたい	ビデオ鑑賞前	28
		ビデオ鑑賞後	30
		第1回交流会後	31
12.	自分のいいたいことを英語で表現したい	ビデオ鑑賞前	26
		ビデオ鑑賞後	28
		第1回交流会後	32

13. いろいろな国の言葉を知りたい	ビデオ鑑賞前	10	26
	ビデオ鑑賞後	9	28
	第1回交流会後	6	31
14. 英語で手紙を書いてみたい	ビデオ鑑賞前	15	21
	ビデオ鑑賞後	13	24
	第1回交流会後	12	25
15. いろいろな国のあいさつを覚えたい	ビデオ鑑賞前	11	25
	ビデオ鑑賞後	10	27
	第1回交流会後	11	26

表4 記述回答部分の分類（クラス毎）

	5-1	5-2	6-1	6-2	合計
コミュニケーション(言語)	3	6	7	4	20
コミュニケーション(交流自体)	19	25	30	26	100
コミュニケーション(積極的な姿勢)	0	1	0	0	1
食文化	7	2	0	2	11
食事以外の文化・言語	3	1	1	2	7
学校生活(給食)	0	2	0	0	2
その他	4	0	0	0	4

a. 授業で楽しかったこと

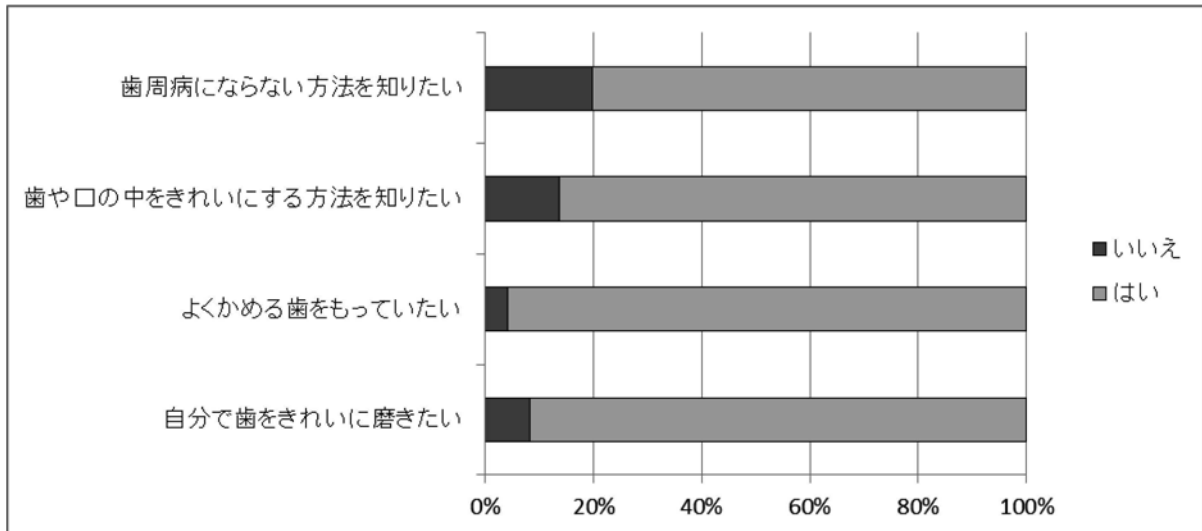
	5-1	5-2	6-1	6-2	合計
コミュニケーション(言語)	8	4	17	9	38
コミュニケーション(交流自体)	4	5	7	8	24
コミュニケーション(積極的な姿勢)	1	2	0	5	8
食文化	15	14	8	8	45
食事以外の文化・言語	5	7	5	4	21
学校生活(給食)	0	0	0	1	1
その他	3	5	1	1	10

b. 新しく発見したこと

	5-1	5-2	6-1	6-2	合計
コミュニケーション(言語)	22	28	14	12	76
コミュニケーション(交流自体)	3	4	4	3	14
コミュニケーション(積極的な姿勢)	9	4	20	21	54
食文化	0	0	0	0	0
食事以外の文化・言語	0	0	0	0	0
学校生活(給食)	1	1	0	0	2
その他	0	0	0	0	0

c. 授業でがんばったこと

表5 口腔保健に関する意識調査項目（5年生および6年生合計）



林原ら（2010）の5年生を対象とした検討では、国際理解に関する関心を構成する4因子（外国語、異文化体験、地球的課題、国際交流）のうち国際交流学習によって「外国語」への関心および「国際交流」への関心が高められたと報告されている。今回、6年生の1クラスを対象に「外国語」、「異文化体験」、「国際交流」に該当する質問項目群ごとに「全く当てはまらない（1点）」、「当てはまらない（2点）」、「当てはまる（3点）」、「よく当てはまる（4点）」として、動画鑑賞前、動画鑑賞後、第1回交流後の平均点についても検討したが、口腔保健に関する項目以外の平均点に関して、ほとんどの児童は交流会前後で「変化なし」、あるいは「交流会後に増加」していたものの、どの群間にも有意な差は認められなかった。一方で、具体的なデータの掲載は省略するが、全体平均より平均点が低く、さらに交流会前よりも交流会後の方がその点が低くなっていた児童が5名（男子3名、女子2名）存在した。その児童らの点数の低くなった項目のうち、「いろいろな国の言葉を知りたい」、「ほかの国の習慣を知りたい」は3名にそれぞれ共通していた。しかし、記述部分には肯定的な表現が書かれていた。この結果に関して、グループワークでのグループに関係があるかどうかの検証は今回できていないが、国際交流学習の効果は、児童の協調性や情緒性とも関連があると報告されていることから（林原ら、2010）、ゲームや交流会でのグループワークが児童の特性に沿ったものではなかった可能性も推察される。

さらに、交流会後の記述部分について、クラスごとに結果を比較した。すると、「授業で楽しかったこと（表4a）」に対しては、全クラスにおいて「コミュニケーション（交流自体）」が最も多い意見であった。一方で、

「新しく発見したこと（表4b）」については、5年生が当日取り上げた内容と関連して「食文化」に関する意見が多かったのに対し、6年生では「コミュニケーション（言語）」が多く、「授業でがんばったこと（表3c）」に対しては、「コミュニケーション（言語）：5年生」と「コミュニケーション（積極的な姿勢）：6年生」がそれぞれ多いという特徴的な傾向が認められた。これは、児童の該当学年時点での外国語学習の到達内容やクラスの普段の雰囲気も背景に存在すると推察された。つまり、前者の視点からは4年生のクラスで英単語や発音などに親しみ始めた5年生児童にとっては「英語を使う」ということ自体が自身の中でのがんばりとして印象付けられ、5年生の段階を経た6年生児童にとっては「わかりあうにはどうすればよいか」ということに目が向いたのではないかと考えられた。さらに、後者の視点から考えると、5年生のクラスが普段から活発にコミュニケーションをとる雰囲気の強いクラスであったため、児童にとって交流会において積極的にコミュニケーションをとること自体は「がんばったこと」として印象に残らなかったのかもしれない。

また、今年度初めて、紹介動画視聴を検討し、交流会当日の活動に多くの時間を使用できるように改善した。これは当初の予定では、交流会前の別日程での視聴を予定して準備していたが、実際は6年生の1クラスを除き当日冒頭での視聴となった。そのため、逆に第1回交流会では直接「口腔」に関わる要素を児童に印象付ける機会が減ってしまった。本報告での検証部分（第1回交流会終了時までの内容）に「口腔」に関わる内容は、歯学部学生自身が作成した動画と当日の自己紹介の中で交流相手が歯学部の学生であることを

口頭およびイラストで簡単に自己紹介したのみであった。動画鑑賞後および第1回交流後の児童の記述回答部分にも期待していた口腔保健や歯、歯学部、歯科医師に関するキーワードが全く認められなかった。瀬戸ら(2007)は、国際理解教育の中での異文化理解教育で扱うべき「外面的分化要素」として、食べ物、衣服、住居、学校の様子、遊びなどを提案している。このことから、本研究の第1回交流会終了時までの内容も方向性としては妥当なものであったと考えている。しかし、児童の「新しく発見したこと」への回答は、直接交流会の中で全員が共通して行った自己紹介ゲームや食文化の紹介に関係するものを中心としていたことから、イラストだけでなく、直接の交流の中でもっと「歯・口」を児童に積極的に印象付ける内容を主要素として組み立てる必要があったということは反省点である。

現段階の研究結果から、国際交流の中で口腔保健に対する児童の意識への影響を与えるためには、楽しいという印象を維持しながらもより直接「口腔保健」に関するテーマを扱い、それに付随して国や地域の違いを取り上げる必要性が示唆された。本プロジェクトの目的の一つである、交流の対象である歯学部学生の背景と連動する口腔保健に対する児童の意識に交流プログラムがどのように影響を及ぼしているのかを明らかにするのは、第2回交流会を待つ必要がある。

第2回交流会では口腔保健に直接関わる内容に設定し、本来の計画でも口腔保健に関する内容をより積極的に取り入れる計画を予定していた。第1回交流会後の口腔保健に関する意識調査項目(表5)においては、両学年共に「歯をきれいに磨くこと」、「よくかめる歯をもっていたい」との意識が高かった。これは、東雲小学校のう蝕罹患率が低い(平成26年度東雲小学校5年生DMFT(dmft)指数平均1.1、6年生平均0.7)ことと背景の一部とも考えられ、近年の日本の12歳児のう蝕罹患率が低い(平成25年度学校保健統計調査12歳児12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯(う歯)等数1.05)こととあわせて、「むし歯予防」を題材に各国の違いを紹介することは国際理解とともに口腔保健への関心を高めるのに児童にとってインパクトのある方

法の一つとなろう。これに対し、「歯周病にならない方法を知りたい」については、関心の低い児童も認められた。今回は、事前に児童自身の歯周疾患についての知識に関する調査を実施していないため、この結果に知識の有無が影響を与えたかどうかは不明であった。しかし、10代において、う蝕以上に歯肉炎への配慮を必要とする。近年では、う蝕に加えて歯肉炎あるいはその先の歯周炎(歯周病)に対する児童本人の意識を高めることは重要である。養護教諭や担任による保健指導とは異なり、国際交流という児童が楽しいと感じる環境の中で、よりなじみの少ない歯肉炎に関する気づきを生じさせることの方が、歯学部との交流会としても意義があると考えられる。口腔保健に対する児童の意識に交流プログラムがどのように影響を及ぼしているのかを明らかにするとともに、第1回交流会までの結果を踏まえ、第2回交流会では各国の特徴を紹介しつつ、歯肉炎への関心が高まる交流の方法を再検討する予定である。

引用(参考)文献

- 1) 林原慎ら(2010)「小学校国際理解教育における国際交流学習の効果—児童の特性からの検討—」『広島大学歯学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第38号, pp.41-46.
- 2) 文部科学省(2014)「12歳の永久歯の一人当たり平均むし歯(う歯)等数」『学校保健統計調査-平成25年度(確定値)の結果の概要Ⅱ調査結果の概要』http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/04/04/1314157_3.pdf, pp19.
- 3) 瀬田幸人(2007)「小学校における理想的な異文化理解教育の実践について—外面的文化要素の観点から」『岡山大学教育学部研究集録』第135号, pp.109-120.
- 4) 厚生労働省(2011)「現在歯に対してう歯を持つ者の割合の年次推移, 5歳以上, 永久歯」『平成23年度歯科疾患実態調査:結果の概要』<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/62-23.html>, 表9.